

## 第5章 総括

### 第1節 縄文時代における遺構の変遷

#### 1 はじめに

赤坂小丸山遺跡では、縄文時代の掘立柱建物跡や集石土坑などの居住に関する遺構の他、落とし穴などの狩猟に関する遺構・遺物が多数検出されている。ここでは、縄文時代の遺構の変遷について考察する。

#### 2 遺構の変遷

赤坂小丸山遺跡では、縄文時代早期から晩期にかけての遺物が多量に出土した。しかし、大半は遺物包含層又は遺構外からの出土で、遺構に伴うものは少なく、一括遺物群としての土器相をつかめるものではないことから、従来の土器編年観に従うこととし、遺物が出土していないものについては、放射性炭素年代測定の結果を考慮して遺構の変遷をみてみることにする。

##### 【縄文時代早期】

早期の遺物は、東区を中心に遺構外から出土しているポジティブ楕円押型文土器や表裏縄文が施される繊維土器がある。押型文土器は黄島式併行期及び高山寺式併行期のものと考えられるもので、出土量は少ない。繊維土器は菱根式併行期と考えられ、認識できたものは1点と僅かであった。

この時期の遺構としては、東区の西側の緩斜面に立地する落とし穴1がある。底面ピット出土炭化物の放射性炭素年代測定により  $6,380 \pm 30\text{BP}$  の年代値が得られ、早期末葉の時期が想定されている。

この時期は、土器が出土するものの量的には僅かであり、遊動の際の一時的な立ち寄り程度であったものと考えられ、落とし穴が中心の土地利用であったものと考えられる。

##### 【縄文時代前期】

前期前半のものは、西区斜面部に立地する落とし穴17、落とし穴23がある。落とし穴17は放射性炭素年代測定により  $5,790 \pm 30\text{BP}$ 、落とし穴23は  $5,440 \pm 30\text{BP}$  の年代値が得られており、前期前葉から中葉頃のものと想定されている。その他、遺構外から出土した爪形文土器があり、西川津式併行期と考えられる。遺物はごく僅かである。

前期後半のものには、東区中央部の緩斜面に立地する落とし穴3がある。放射性炭素年代測定により  $5,100 \pm 30\text{BP}$  という測定値が得られ、前期中葉から後葉の時期が想定されている。

この時期は、早期と同様に落とし穴が中心となった土地利用であったものと考えられ、集落は形成されていない。

##### 【縄文時代中期】

中期が、最も遺構・遺物とも多産される時期である。

遺構には、東区の集石土坑1・2、西区の集石土坑3・4・6・7、西区の土坑1・10・11、西区の落とし穴21がある。

このうち、時期的に最も遡る遺構として落とし穴21がある。放射性炭素年代測定によって  $4,580 \pm 30\text{BP}$  という年代値が得られ、中期初頭の時期が想定されたもので、この時期にも落とし穴が行われていた可能性がある。集落が形成される直前頃の時期であり、早期から中期初頭頃までは、この

## 第5章 総括

地が狩猟場として利用されたものといえよう。

最も遺構が集中するのは中期中葉から末葉にかけてで、居住施設は検出されていないが、当該期の土器（船元Ⅲ式～北白川C式）が多量に出土しており、中期中葉から末葉にかけて、調査区周辺域で断続的に集落が営まれていた可能性が非常に高い。

放射性炭素年代測定では、集石土坑1は $4,200 \pm 30\text{BP}$ 、集石土坑2は $4,090 \pm 30\text{BP}$ 、集石土坑3は $4,150 \pm 30\text{BP}$ という年代値を得た。いずれも中期後葉頃に相当するものと考えられる。位置関係を見ると、東区の集石土坑2基は約10mの間隔にありセットとして捉えることが可能である。また、西区の4基についても径約25mの楕円の範囲に集まることから、セットとして捉えることが可能で、ほぼ同時期に形成されたものと考えられる。出土土器には、船元Ⅲ式併行から里木Ⅱ式併行の土器片が出土しており、炭素年代値とほぼ合致するものとする。

土坑についても船元Ⅲ式併行から里木Ⅱ式併行の土器が出土しており、集石土坑とともに形成されたものと考えられる。土坑1は長方形の平面形を呈し箱掘りされたもので、埋め戻された可能性があることから、墓壇の可能性が考えられている。

なお、調査区内で黒曜石製を中心とした石鏃が多量に出土しており、未成品や剥片なども出土していることから、石鏃製作を行っていた可能性が高い。時期を特定することはできないが、最も遺物量が多い縄文時代中期中葉から末葉にかけての集落形成段階に石器製作も行われていた可能性が高いものとする。

### 【縄文時代後期】

その他に集落関連の遺構は検出されていない。

その他、中津式から福田KⅡ式古段階にかけての遺物や宮滝式期の遺物が出土しているが、出土量としてはごく僅かであり、集落を形成していたものとは考えにくい。

### 【縄文時代晩期】

再び集落が形成される時期である。検出した遺構は、東区の晩期前半期の掘立柱建物1、西区の晩期後半期の掘立柱建物2～4、集石土坑5、土坑4・6・8・9・40である。

掘立柱建物1からは、後期初頭の鳥式の土器片が出土しているが、放射性炭素年代測定で $2,940 \pm 30\text{BP}$ の年代値が得られており、晩期前半期のものと想定される。1間×1間の構造で、竪穴建物の柱穴部分である可能性もある。その他、晩期前半期の土器が出土しているが、出土量としては僅かであり、晩期前半段階においては、明確に集落が形成されていたものとは考えにくい。

後半期では、掘立柱建物跡はいずれも1間×2間の構造で、3棟が近接した状態で建てられている<sup>1)</sup>。同時期の集石土坑5や土坑6とも近接しており、これらは同時には形成されていないものとする。集石土坑5は両小口側に石を配する墓壇の可能性が、土坑40は素掘りの墓壇の可能性があり、いずれも人為的に埋められたと考えられる土層堆積を示す。その他の土坑の性格は不明である。

この時期の土器類が比較的多く出土しており、晩期後半段階において周辺域で集落が形成されていたものと考えられる。

## 3 落とし穴

当遺跡では、縄文時代早期末から前期にかけて落とし穴が行われていたものと考えられる。検出された落とし穴は25基である。

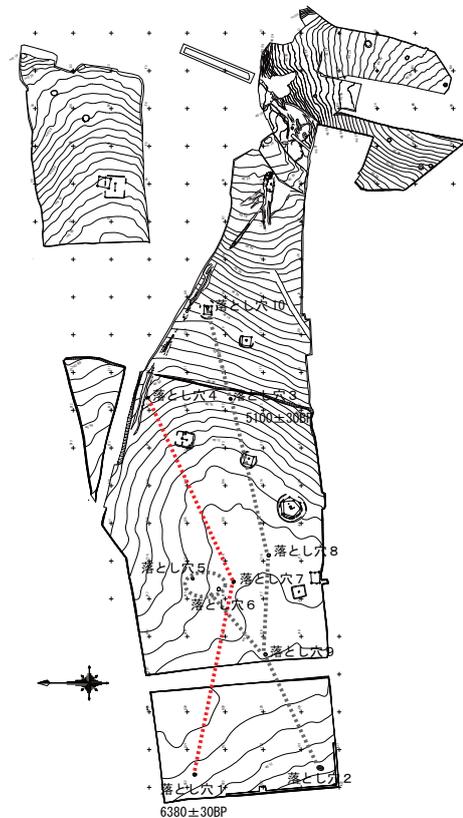
落とし穴は、獣道に設置される場合が多いものと考えられ、ひとつの獣道に対し2～5基程度の落とし穴が設置される可能性が指摘されているが（牧本2013）、同時代性をつかむことができる例はほとんどないため、その配列については、不明な点が多いのが現状である。当遺跡の場合、計25基の落とし穴のうち、5基で放射性炭素年代測定を行った結果、早期末から中期初頭の時期の可能性が指摘されたのであるが、セット関係は必ずしも明確ではない。

落とし穴の形態については、これまで、平面形（検出面・底面）、底面ピットの有無、断面形の要素を加味して分類されることが多かった（牧本2012、濱2013）。ここでは、これらの分類基準に加えて、規模の要素も付け加えて分類を行い、想定される落とし穴配列を考えてみることにする。

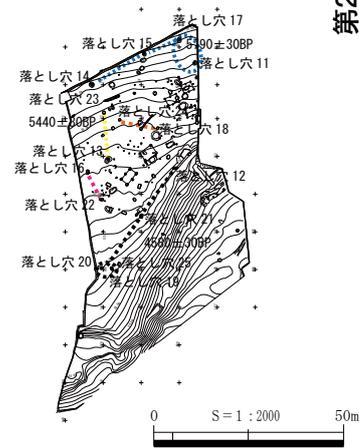
規模をみると、平面規模は平面積（長軸×短軸）を比較して1.0㎡未満の小型、1.0～1.5㎡程度の中型、2.0㎡程度以上の大型の部類に分けることが可能である。深さについては、遺構の遺存状態に左右されることが大きいこともあり、分類基準から外されてきたが、漠然と深いものと浅いものがあることは考えられそうである。ここでは、1.5m未満のものと1.5m以上ものに分けてみる。

ところで、赤坂小丸山遺跡の立地的な特長について簡単に触れておく。当遺跡は、大山山系から派生する標高約73mの舌状に延びる丘陵上に展開する。東区とした調査区は概ね丘陵頂部から緩やかに傾斜する東側斜面にある。西区とした調査区は、丘陵頂部からやや西側に下った西側斜面部にあり、地形的には、東区と西区はやや異なるのが特徴である。

東区で検出された落とし穴は、丘陵頂部の平坦面付近から緩斜面部にまとまる。形態的には、底面ピットをもつグループ（列1：落とし穴1・7・4）と底面ピットを持たないグループ（列2：落とし穴2・3・5・6・9・10）があり、これらがセットで配置された可能性が考えられる。列2では、落とし穴5・6が近接して作られており、単独で形成されたものか列が分岐していたものと考えることが可能である。



- 凡例
- 列1 ●●●●●
  - 列2 ●●●●●
  - 列3 ●●●●●
  - 列4 ●●●●●
  - 列5 ●●●●●
  - 列6 ●●●●●
  - 列7 ●●●●●



第217図 赤坂小丸山遺跡における落とし穴の配置

表60 赤坂小丸山遺跡の落とし穴一覧表

遺構名	地区	規模 (長軸×短軸-深さ) m	平面積㎡	形態	時期
落とし穴1	東区	1.0 × 0.84 - 1.38	0.84	D b 有小 浅	6,380 ± 30BP、縄文時代早期末
落とし穴2	東区	1.82 × 1.22 - 1.18	2.22	D b 無大 浅	
落とし穴3	東区	0.7 × 0.7 - 1.2	0.49	B a 無小 浅	5,100 ± 30BP、縄文時代前期中～後葉
落とし穴4	東区	1.0 × 0.66 - 1.27	0.66	B b 有小 浅	
落とし穴5	東区	1.0 × 0.96 - 1.26	0.96	B f 無小 浅	
落とし穴6	東区	1.04 × 0.8 - 1.15	0.83	B c 無小 浅	
落とし穴7	東区	0.9 × 0.9 - 1.07	0.81	D a 有小 浅	
落とし穴8	東区	0.9 × 0.9 - 1.05	0.81	A b 無中 浅	
落とし穴9	東区	1.0 × 1.0 - 0.94	1.00	A c 無小 浅	
落とし穴10	東区	0.8 × 0.8 - 0.7	0.64	A b 無小 浅	
落とし穴11	西区	1.25 × 0.95 - 1.2	1.19	B b 有中 浅	
落とし穴12	西区	1.2 × 0.6 - 0.9	0.72	C a 有小 浅	
落とし穴13	西区	0.8 × 0.8 - 1.6	0.64	A c 有小 深	
落とし穴14	西区	1.8 × 1.2 - 1.5	2.16	B f 有大 深	
落とし穴15	西区	1.5 × 0.9 - 1.1	1.35	B b 有中 浅	
落とし穴16	西区	1.2 × 0.8 - 0.7	0.96	B a 有小 浅	
落とし穴17	西区	1.9 × 1.0 - 1.5	1.90	B b 有大 深	5,790 ± 30BP、縄文時代前期前葉
落とし穴18	西区	0.6 × 0.6 - 0.7	0.36	A a 無小 浅	
落とし穴19	西区	1.1 × 0.7 - 0.9	0.77	B b 有小 浅	
落とし穴20	西区	0.9 × 0.6 - 1.3	0.54	B a 有小 浅	
落とし穴21	西区	1.2 × 0.9 - 0.6	0.86	B c 有小 浅	4,580 ± 30BP、縄文時代中期初頭
落とし穴22	西区	1.2 × 0.7 - 0.9	0.84	C c 有小 浅	
落とし穴23	西区	0.6 × 0.6 - 0.8	0.36	A f 有小 浅	5,440 ± 30BP、縄文時代前期前～中葉
落とし穴24	西区	0.7 × 0.7 - 0.8	0.49	A a 無小 浅	
落とし穴25	西区	1.4 × 0.9 - 0.8	1.26	B c 無中 浅	

列1では落とし穴の間隔が50 m以上、列2の落とし穴の間隔が25～43 m程度となる。列1・2とも、落とし穴の間隔が広く、列1としたものは、それぞれが単独したものといってもよいぐらいである。配列は丘陵に対し直交することになる。形態的には列1・2のものとも、落とし穴2を除いて平面積1㎡以下の小型で浅いことが特徴である。

時期については、東区のグループのうち落とし穴1（列1）が縄文時代早期末、落とし穴3（列3）が縄文時代前期中葉から後葉と想定され、かなりの時期差が認められ、形態差が時期的な差として現れているものとする。

西区で検出されたものは緩斜面部に形成されたものである。底面ピットを持たないもの（落とし穴18・24・25）、底面ピットをもつもの（落とし穴11・12・13・14・15・16・17・19・20・21・22・

表61 落とし穴分類表

平面形	断面形		底面ピット (有無)	平面規模	深浅	
円形	A	垂直型	a	有/無	大/中/小	深/浅
		外傾型	b	有/無	大/中/小	深/浅
		外反型	c	有	大/中/小	深/浅
		くびれ型	d	有	大/中/小	深/浅
		徳利型	e	無	大/中/小	深/浅
		袋型	f	無	大/中/小	深/浅
楕円形	B	垂直型	a	有り	大/中/小	深/浅
		外傾型	b	有/無	大/中/小	深/浅
		外反型	c	有	大/中/小	深/浅
長方形	C	垂直型	a	有	大/中/小	深/浅
		外傾型	b	有	大/中/小	深/浅
		外反型	c	有	大/中/小	深/浅
隅丸方形	D	外傾型	b	無	大/中/小	深/浅
		くびれ型	d	無	大/中/小	深/浅

23) となる。

底面ピットを持たないものは、等高線に沿うように落とし穴18・24が約10mの間隔を持って並びそうである(列3)。落とし穴25は単独で存在するものか。

底面ピットを持つものは、東側調査区際の落とし穴11・17・15・14のグループ(列4)、北東側の落とし穴13・23のグループ(列5)、中央北側の落とし穴13・16のグループ(列6)、西側の落とし穴12・21・19・20のグループ(列7)に分けることが可能で、それぞれが列をなす可能性がある。形態的には、列3のものは大型で深いものがあり他の列のものとは異なる要素である。列5は平面形が小型のA形で、等高線に対し直交する。列6は小型のB又はC形ではあるが細長いもので、等高線に対し直交する。

これらのうち、比較的近接するものがあり、列3の落とし穴11・17、列7の落とし穴19・20は、同じ列での作り替えられた可能性がある<sup>2)</sup>。

落とし穴の間隔は、列3が約10m、列4が10～15m程度、列5が約12m、列6が約8m、列7が15m程度となり、東区のものとは比べて間隔がかなり狭い。列3・4・7は等高線に沿うように配列されるが、列5・6は等高線に対し直交するという特徴がある。

時期は、落とし穴17(列4)が縄文時代前期前葉、落とし穴21(列7)が縄文時代中期初頭、落とし穴23(列5)が縄文時代前期中葉から後葉と想定される。

これら落とし穴は、継続的に使用されたものとは考えにくく、比較的短期間に使用され、移動して行ったものと考えることが可能であろう。このことは、放射性年代測定値が示す値がかなりの時間幅があることから窺える。

以上のように想定したが、実際のところセット関係は不明であり、形態別に年代測定を実施しても、測定したものの時期が想定されるだけで、セット関係を明らかにすることはできないことから、今後は、すべての落とし穴に対して年代測定を行い、同時代性を捉えた後に配列等を考察すべきと考える。

#### 4 集石土坑・土坑

当遺跡で、集落関連の遺構が出現するのが縄文時代中期中葉から末葉、縄文時代晩期後半の2時期であるが、連続して遺構が形成されたものではなく、断続的に形成されたものと考えられる。

【中期】

その中で、当該期の集石土坑・土坑がまとまって検出されている。東区では2基（集石土坑1・2）、西区では4基（集石土坑3・4・6・7）である。

放射性炭素年代測定が行われており、集石土坑1では4,200 ± 30BP、集石土坑2では4,090 ± 30BP、集石土坑3では4,150 ± 30BPの年代値が得られており、縄文時代中期後葉頃のものと推定されている。集石土坑1と集石土坑3は、ほぼ同時期と考えてもよい値であることから、東側斜面部、西側斜面部において別々の集団の存在が想定できようか。

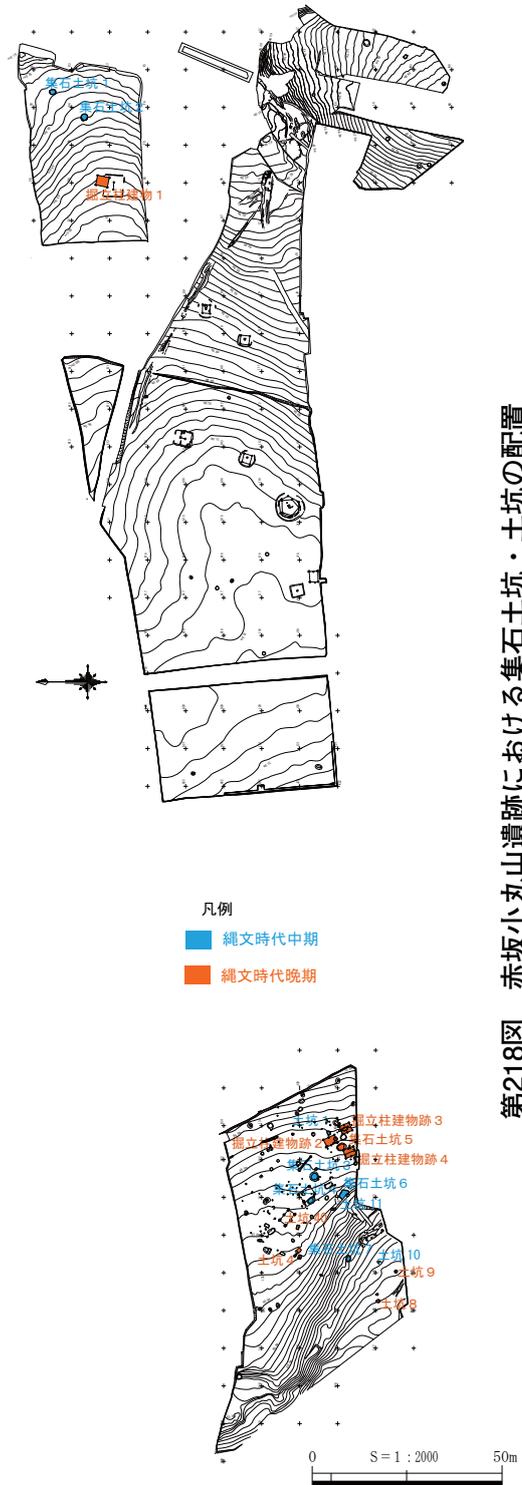
形態的には、径1.5～2.5mの円形又は楕円形を呈し、浅く窪めた土坑内に炭化物・焼土と共に拳大から人頭大の角礫が入るものである。礫は底面からやや浮いた状態で検出されるものが多く、本来土坑内に設置されたとは考えにくい。集石土坑1に見られるように、埋め戻したような最下層上に礫が並べられ、その上面で火を焚くなどの行為があったものと考えられる。いずれの土坑壁面には被熱痕跡は認められないものの、被熱した角礫や炭化物が出土していることから、長期間ではないにしろ火を使用した用途が考えられる。とくに、集石土坑1では、被熱礫と共に土器がまとまって出土しており、廃絶時に土器も廃棄されたものと考えられる。伴う住居が検出されていないので、性格は明確にはしがたいが、屋外炉の可能性を指摘しておきたい。

土坑は14基検出されているが、そのうち時期が判明しているものは、中期のものが西区の土坑1・10・11の3基である。いずれも中期後葉頃のものと推定される。この3基は、斜面部を直交するように17～20m間隔に並んでいるように見える。土坑1は箱掘りされたもので、人為的な埋め戻しが考えられることから、墓塚の可能性が指摘されている。土坑11は集石土坑6を切るようにあり、時期差が認められる。

【晩期】

この時期のものは、西区の集石土坑5、西区の土坑4・6・8・9・40である。

集石土坑5は、中期の集石土坑では一般的であった



第218図 赤坂小丸山遺跡における集石土坑・土坑の配置

表62 赤坂小丸山遺跡の集石土坑一覧表

遺構名	地区	規模 (長軸×短軸-深さ) m	平面形	出土遺物	時期	備考
集石土坑1	東区	1.76 × 1.42 - 0.28	楕円形	土器・凹石・角礫・炭化物・ 焼土	4,200 ± 30BP、 縄文時代中期後葉	角礫被熱
集石土坑2	東区	1.7 × 1.7 - 0.26	円形	角礫・炭化物粒		角礫被熱
集石土坑3	西区	2.5 × 2.2 - 0.7	楕円形	土器・石鏃・楔形石器・角礫・ 炭化物	4,150 ± 30BP、 縄文時代中期後葉	角礫被熱
集石土坑4	西区	2.15 × 1.5 - 0.4	楕円形	土器・角礫・炭化物・焼土		角礫被熱
集石土坑5	西区	2.6 × 1.9 - 0.3	楕円形	土器・石鏃・角礫	縄文時代晩期後葉	
集石土坑6	西区	2.8 × 1.7 - 0.4	隅丸方形	土器・石鏃・角礫・炭化物・ 焼土	縄文時代中期末葉	
集石土坑7	西区	1.8 × 1.3 - 0.25	不整楕円形	土器・石皿・角礫・焼土	縄文時代中期から後期か	

被熱礫や炭化物、焼土の出土がなく、角礫のみが出土していることから、中期とは異なる性格のもので、墓壙の可能性もあろう。突帯文土器が出土していることから、当該期以降に埋没したものと考えられる。同時期の土坑6と近接している。同時期の土坑4・40、土坑8・9においてもそれぞれが比較的近接して造られている。土坑40は墓壙と考えられており、その他の土坑についても墓壙の可能性もあり、構造は異なるが2基1単位の墓壙群が形成されている可能性がある。

とくに、集石土坑5・土坑6は掘立柱建物跡と近接しすぎており、時間差が考えられる。

## 【註】

- 1) それぞれが近接しすぎており、同時には存在していないものとする。時期については、後世の時代まで下る可能性があるが、柱穴内から出土した突帯文土器から判断した。
- 2) 10 m以内で近接した落とし穴は、同じ配列の中で作り替えられた可能性が指摘されている（牧本2013）。

## 【参考文献】

- 濱隆造 2013 「鳥取県・西坪中中畝遺跡の落とし穴」『中四国地方における縄文時代の落とし穴』第24回中四国縄文研究会 鳥取大会 中四国縄文研究会
- 牧本哲雄 2012 「第5章総括 第1節 殿河内定屋ノ前遺跡の落とし穴について」『殿河内定屋ノ前遺跡』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書45 鳥取県埋蔵文化財センター
- 牧本哲雄 2013 「落とし穴の配列について～大山山麓を中心に～」『中四国地方における縄文時代の落とし穴』第24回中四国縄文研究会鳥取大会 中四国縄文研究会